

国民形成と魯迅精神に関する議論の考察

——中国の国語教科書における魯迅作品の扱い——

武 小燕

はじめに

魯迅は近代中国の代表的な文学者、思想家であり、「民族の魂」と高く評価されたことは周知の通りである。彼の作品は中国の国語教育で重要な位置を占め、魯迅精神の見習いは国民形成のなかで求められていた。しかし、魯迅作品の何が評価されているか、魯迅精神の中身が何かは時代によって異なる。改革開放以降、魯迅と魯迅作品に関する研究視点が多様となり、毛沢東時代における革命性や闘争性といったステレオタイプ的な評価は変化しつつある。他方、改革開放以降の国語教育も改革を重ね、総じてコミュニズムの重視からヒューマニズムの重視へと変容してきた⁽¹⁾。こうした変容は教科書に掲載された魯迅作品の取捨選択にどんな影響があり、その影響を人々がどう評価しているのだろうか。本研究では中国の国語教育における魯迅作品の扱いを中心に、中国社会と学校教育における魯迅・魯迅作品への評価の変容を考察し、国民形成の在り方の変化を検討する。

I 魯迅像と魯迅精神の変容

中国における魯迅評価は長らく毛沢東からの影響が大きく、有名な「魯迅精神」も毛沢東が名付けたものである。1937年10月に革命根拠地の延安で開催された魯迅逝去1周年記念大会で、毛は魯迅が共産党員ではないが「党外のボルシェビキである」と評し、魯迅の「革命性」「闘争性」「自己犠牲の精神」を讃え、それを「魯迅精神」と名付けた。それに続いて

(1) 武小燕『改革開放後中国の愛国主義教育：社会の近代化と徳育の機能をめぐって』大学教育出版、2013年、206-226頁。

1940年1月に出版された革命の新しい指針となる「新民主主義論」では、毛は魯迅を文化戦線における「最も正しく、最も勇敢で、最も決然とし、最も誠実で、最も情熱的な民族英雄である」と絶賛し、「魯迅の方向こそ、中華民族の新文化の方向である」と位置付けた⁽²⁾。さらに、1942年5月の延安文芸座談会では「すべての共産黨員、すべての革命家、すべての文芸従事者はみな魯迅を手本とすべきであり、プロレタリアと人民大衆の『牛』となり、死ぬまで献身的に尽くすべきだ」と呼びかけた⁽³⁾。

毛沢東は魯迅を近代中国の「聖人」と持ち上げたが、彼が評価したのは魯迅作品の文学性というよりはその革命性であり、「革命性」「闘争性」「自己犠牲」をキーワードとする魯迅精神はプロレタリア精神を色濃く持っていた。

1. 革命魯迅像の普及

毛沢東の影響の下で、当時の解放区で使用される国語教科書には魯迅の作品が数多く収録された。もともと、魯迅の作品の国語教科書への採録は共産党政権により始められたわけではない。1920年代から中華民国の中学や高校の国語教科書に『呐喊』や『野草』などの作品が掲載されていた。しかし、それは量的に特に目立つほどではなく、またジャンルの的には小説の収録が多かった⁽⁴⁾。つまり、魯迅は新文学の代表的作家の一人として位置付けられていたにすぎない。ところが、共産党政権の解放区では中学と高校の国語教科書に掲載された魯迅作品は毛沢東の作品に次いで2番目に多く、特に鋭い社会批判に満ちた雑文がふんだんに取り入れられた⁽⁵⁾。こうした雑文重視の傾向は「雑文の中に反映された古い社会への批判、労働者や庶民の重視、ソ連を見習うべきとの主張などがいずれも当時の〔引用者注：解放区の〕イデオロギーと一致していた」ためだと指摘される⁽⁶⁾。

中華人民共和国成立後、魯迅の作品は国語教育において最も重要なもの

(2) 竹内実監修、毛沢東文献資料研究会編集『毛沢東集 第7巻 延安期Ⅲ (1939.9～1941.6)』北望社、1971年、191-192頁。

(3) 「在延安文芸座談会上的講話」(1942年5月) <https://www.marxists.org/chinese/maozedong/marxist.org-chinese-mao-194205.htm> (2021年9月1日閲覧)

(4) 李斌「民国時期中学教材中的魯迅作品」『語文建設』2013年第22期、2013年8月、58頁。
趙獻濤「民国時期国文課本中的魯迅作品」『魯迅研究月刊』2011年10期、35-39頁。

(5) 前掲、李斌(2013年)、60-61頁。

(6) 李倩「1940年代末解放区語文教材中的魯迅作品」『魯迅研究月刊』2013年第8期、67頁。

となる。1956年に公布された中学校校文学教学大綱は、「魯迅の作品は教学大綱で定めた現代文学作品のなかで最大の比重を占める…（中略）…中学校一年生から魯迅の作品を学び、学年が上がるにつれて数を増やし難しい作品を扱う。」とし、魯迅作品が「人民を圧迫する封建主義と帝国主義に反対し、人民革命を謳い、人民の闘志を奮い立たせる」ものだと位置づけた⁽⁷⁾。同教学大綱で挙げられた作品一覧では魯迅作品を、「孔乙己」「故郷」「我々はもうだまされない」（我們不再受騙了）、「利口者と馬鹿と奴隸」（聰明人和傻子和奴才）などの10点も挙げたほか、魯迅に関する紹介文を2点入れた。魯迅作品の数が各作家のなかで最多であった。また、新中国の国語教育では、文字や用語を規範し思想教育の趣旨に一致するように、ほとんどの収録作品が余儀なく修正されたが、毛沢東等の指導者と魯迅の作品だけは一字の修正も認めず、原文のまま収録された⁽⁸⁾。

しかし、魯迅作品が原文のまま掲載されたのは、作品本来の趣旨を最大限に尊重することを意味しない。文革期に魯迅作品の教師用参考書を編集した上海師範大学の史承鈞は、当時の国語教育では毛沢東の魯迅評価を元に、「政治的なニーズに基づいて魯迅の闘争性を誇張し、革命家とりわけプロレタリア革命家としての魯迅像を突出させ、神聖化した。そして魯迅の作品については、階級闘争の視点で解釈したり政治化したりしていた。これは魯迅と魯迅作品の理解にはよくなかった」⁽⁹⁾と反省した。魯迅と魯迅作品に関する当時の読解は毛沢東が下した「革命性」「闘争性」の評価に基づいて行われた。

革命魯迅像の普及は文革後期に極めた。過激な政治運動によって多くの作家が批判され、彼らの作品が発禁処分を受けるなか、1972年以降魯迅文集は全国で大規模に発行され、魯迅作品は国語教科書で唯一扱える現代文学となった⁽¹⁰⁾。全国各地が編集した国語教科書には魯迅作品が大量に掲

(7) 課程教材研究所編『20世紀中国中小学課程標準・教学大綱匯編 語文卷』人民教育出版社、2001年、335頁。

(8) 潘曉凌「教科書：刪得掉的文字、刪不掉的『秘密』」『語文世界』2009年第10期、26頁。

(9) 史承鈞「解除束縛、真實地感受魯迅——從反思我主持編纂的『魯迅作品教学參考資料』談起」『上海魯迅研究』2009年第4期、2009年12月、35頁。

(10) 張勇「梳理教材中的魯迅作品：『文革』時曾是唯一教材」（2013年9月10日）<http://culture.people.com.cn/n/2013/0910/c172318-22869642.html>（2021年11月10日閲覧）

載されたが、その解釈は作品の趣旨から遠く離れるものであった⁽¹¹⁾。

このように共産党政権の下での魯迅は、中華民国期に「民族の魂」と称えられたこととは異なる意味で高く評価された。それはもっぱらプロレタリア革命の観点から魯迅の闘争性や革命性を見習おうというものであり、こうした魯迅精神は国語教育等を通して国民形成に貢献するようにと追求された。

2. 魯迅像の多様化

改革開放が始まると、魯迅作品に対するステレオタイプな読解への反省と批判から、魯迅研究はブームを迎えた。表1で示されたように、魯迅が小説を発表し始めた1913年から文革終了の1976年10月までの間に出版された魯迅研究に関する本は455冊、論文や記事は6,454点であるのに対し、1977-1989年の12年間にはそれぞれ507冊と10,109点が出版され、それまでの63年間よりも多かった。1990年代になると、魯迅研究は一時的に下火になったが、魯迅作品の出版は1980年代より増えた。そして、2000年代に入ると魯迅作品の出版も魯迅研究に関する本や論文も急増し、魯迅にはかつてないほどの関心が集った。

表1 中国国内における魯迅作品および魯迅研究作品の出版状況 (1913-2010)

時期	魯迅作品の出版物		魯迅研究に関する本		魯迅研究に関する論文や記事	
	冊数	%	冊数	%	篇数	%
1913-1927.3	8	0.6	1	0.1	96	0.3
1927.4-1949.9	69	5.6	79	4.8	1,276	4.4
1949.10-1966.5	166	13.4	162	9.8	3,206	11.0
1966.6-1976.10	205	16.5	213	12.9	1,876	6.4
1977-1979	50	4.0	134	8.1	2,243	7.7
1980-1989	95	7.6	373	22.6	7,866	27.0
1990-1999	189	15.2	220	13.3	4,485	15.4
2000-2010.10	460	37.0	468	28.4	8,119	27.8
合計 (1913-2010.10)	1,242	100.0	1,650	100.0	29,167	100.0

出所：葛濤「中国魯迅著作出版与文章發表状況」周令飛監修『魯迅社会影響調査報告』人民日報出版社、北京、2011年、20頁、36頁、46頁の統計表に基づき筆者作成。

(11) 周令飛監修『魯迅社会影響調査報告』人民日報出版社、2011年、63頁。

こうした数字上の変化は偶然ではなく、それぞれの時代背景と魯迅像の多様化と大きく関係している。

改革開放初期の魯迅研究は「本来の魯迅を毛沢東の負の影響から抜け出させる」ことが重要なテーマであった⁽¹²⁾。永末が1982年の論文で指摘したように、文革以降の若者たちは「魯迅を尊敬し、魯迅の独立思考の精神に学んで、『與えられる教育』よりも『自分の頭で考える教育』を望んでおり、『既成の魯迅』『與えられた魯迅』には食傷気味」であった⁽¹³⁾。王富仁が1984年の博士論文では、魯迅は反帝国主義を意識しておらず、あくまでも反封建主義の思想家だと当時にしては大胆な指摘をした。こうした指摘が多く共鳴を起し、革命家魯迅ではなく、思想家や文学者としての魯迅への関心を促した⁽¹⁴⁾。こうした関心は中国革命の指導者に作られた革命的イデオロギーの代弁者としての魯迅像とその魯迅像しか論じられなかった魯迅研究への反発だったと言える。「党と国家のイデオロギーの規範という重い荷を背負っている」と言われた魯迅研究は、80年代の思想解放運動で次第に聖人ではなく一人の人間としての魯迅、現実の政治のみ重んじる視点ではなく国内外の様々な文化とのつながりのなかで思考する魯迅、政治・経済・文化などへの批判者としての魯迅へと研究の視点が変わり、魯迅精神に対する理解が変化した⁽¹⁵⁾。1980年代に「本来の魯迅を取り戻す」、「魯迅に近づく」、「啓蒙魯迅」が主張され、そのいずれも革命に粉飾された魯迅像を否定し、魯迅の本来の姿とその思想の啓蒙性・批判性を重要視し、そこから社会変革を推し進める原動力を見出そうとした。1977-89年の魯迅研究はこうした時代背景の下で盛んになった。

1990年代に入ると、六四運動を契機に理想主義の思想解放運動は挫折し、沈静化した。他方、経済政策や社会政策の規制緩和が進み、価値観が多様化した。さまざまな思潮が中国社会に登場してきたが、人々は魯迅研

(12) 張夢陽『中国魯迅学通史・広観反思卷』広東教育出版社、2001年、519頁。

(13) 永末嘉孝「現代中国における魯迅：初級・高級中学『語文』教科書を中心に」『中国文学論集』(11)、1982年10月、179頁。

(14) 王富仁の博士論文の要旨が次の雑誌に掲載されたことでその観点は広く知られるようになった。王富仁「《吶喊》《彷徨》総論(博士学位論文摘要・上)」『文学評論』1985年6月、3-14頁。王富仁「《吶喊》《彷徨》総論(博士学位論文摘要・下)」『文学評論』1985年8月、77-92頁。

(15) 汪暉「魯迅研究的歴史批判」『文学評論』1988年12月、5頁、16-17頁。

究を深めるどころか、「そのほとんどは『魯迅批判』から自らの主張を始めた」のである⁽¹⁶⁾。例えば、新保守主義者は急進主義を批判し、五四運動を否定し、魯迅の啓蒙主義を専制主義とみなす。伝統文化を擁護する新儒学者や国学者は伝統文化の封建性を容赦なく批判してきた魯迅を好ましく思わない。自由主義者はさまざまな人に向けて辛辣な意見を発した魯迅の不寛容さを批判する。ポスト・モダニストは近代性に満ちた魯迅に共感を持たず、ポスト・コロナリズムは魯迅の国民改造の思想を西洋覇権主義における文化の拡張に対する追従だとみなす。つまり、魯迅研究はイデオロギーの代弁者という従来のイメージをまだ払しょくしきれないうちに、新しく台頭した思潮からの様々な批判により、体制内外から敬遠されるようになった。他方、1990年代後半に民国研究が台頭し、歴史の真実に近づこうとする動きが広がったが、そこで発見された多様な魯迅像は後の魯迅ブームの土台を築いた。

2001年に中国はWTO加盟を果たし、中国が世界と自分自身にどう向き合うべきかがますます問われるようになった。この問いは100年前に魯迅が経験した時代の課題に重なる。チャイナドリームにいかなる国民や個人が必要かを考える際に、人々は国民改造に関心を向け続けた魯迅にその答えを探った。魯迅研究者の張夢陽が述べた次の言葉は、2000年代以降の時代の課題と魯迅ブームの関係を分かりやすく示している。

「中国における魯迅の価値は中国人の精神に対する鋭い反省と暗黒に対する粘り強い反抗である。20世紀の中国が封建的専制から近代文明に転換する時期に、魯迅は数千年の封建的な束縛の下に置かれた中国人の精神を徹底的に反省し、精神的な解放と独立と思想の自由を得るために、中国人に思想の縛りから抜け出すように促した。こうした精神を受け継ぐことによって私たちは自分や世界を正しくとらえ、世界における自分たちの位置づけを確かめ、世界の国々の中で自立し、中華民族の偉大な復興を実現することができよう。」⁽¹⁷⁾

総じて、改革開放以降の魯迅研究は政治的イデオロギーからの解放を目指しつつ、「啓蒙魯迅」「文学者魯迅」「人文魯迅」「世俗魯迅」など、魯迅

(16) 銭理群『魯迅与当代中国』北京大学出版社、2017年、55頁。

(17) 張夢陽「魯迅在今天的意義」『光明日報』2006年10月23日。

の本来の姿と魯迅作品の趣旨により近づこうとする研究がなされてきた。これらの視点に時には対立もみられるが、「その殆どは『革命魯迅』を薄めたり拒否したり否定したりするという側面に立っている」⁽¹⁸⁾ことが共通している。

3. ネット世界の魯迅像

21世紀の特徴の一つは情報社会の進展である。魯迅を称賛するにせよ批判するにせよ、これまでの評論は主に研究者等の文化的エリートによって行われてきたが、2000年代以降、一般民衆の魯迅への関心がインターネット等を通して表面化し、魯迅に対する関心の高まりに拍車をかけた。

2000年1月1日に人気夕刊紙の『揚子晩報』で報道された「インターネットに登場した作家のランキング」で、魯迅は9,874のウェブページで大陸の物故作家の首位を占めた⁽¹⁹⁾。2003年6月にポータルサイトの新浪はほかのメディアと連携して「二十世紀の憧れの文化人物」に関するネット調査を行い、14万人余が投票した中で魯迅は57,259票を獲得して2位を1万7000票もリードした⁽²⁰⁾。同時に、魯迅に対する評価の多様性も浮き彫りになる。2003年にポータルサイトの網易が行った、「魯迅の是非」をテーマとするネット調査の結果は表2の通りである。大半の人々は魯迅とその作品をポジティブに評価するが、2割前後の人々はマイナスな評価をしていることが分かる。

2006年に新浪が『華夏時報』と協同で行ったネット調査では、「魯迅否定論についてあなたはどうか」という質問に対して、649人のネットユーザーが回答した。「大衆の注目を狙ったもので議論に値しない」が38.52%、「ほとんど賛成できないが、納得する部分もある」が26.35%、「よく分からないので判断できない」が20.47%、「大いに賛成。魯迅は神様扱いがされているが、人為的に魯迅を高めるべきではない」が14.66%を占めるといった結果であった⁽²¹⁾。

(18) 唐利群 「『魯迅大撤退』の背後：知識生産と意識形態」『文芸理論と批判』2016年第3期、57頁。

(19) 葛濤 『「網絡魯迅」研究』北京師範大学出版集団安徽大学出版社、2012年、10頁。

(20) 前掲、葛濤 (2012)、188頁。

(21) 前掲、葛濤 (2012)、190-191頁。

表2 「魯迅の是非」に関するネット調査の結果

魯迅の作品をどう思われるか	得票数	%	魯迅をどう思われるか	得票数	%
力強くて闘争性がある	2,614	28.0	戦士	3,944	42.5
心が打たれて大いに考えさせられる	4,652	49.8	優秀な作家	2,664	28.7
とげとげしくて嫌い	1,064	11.4	闘争好きな人	1,673	18.0
書生の意見に過ぎず、大した意義がない	470	5.0	文章で生計を立てる人	664	7.2
ノーコメント	543	5.8	分からない	332	3.6
合計	9,343	100.0	合計	9,277	100.0

出所：葛濤『「網絡魯迅」研究』北京師範大学出版社安徽大学出版社、安徽、2012年、189頁の内容に基づき筆者作成。

ネット世界における魯迅への関心は、政治的なイデオロギー論や学術的な分析と異なり、もっぱら社会現実や貧困層が抱える課題に関心をもち、社会問題を批判する傾向が強い。こうした声は「魯迅の批判精神を継承し、現実や大衆に寄り添い、一定程度で大衆の意見を代弁するものであり、民間の姿勢が鮮明だ」⁽²²⁾と指摘され、社会批判家としての魯迅像が特に評価された。

一方、葛濤によればインターネットの世界では著名人の魯迅を取り上げる背後には、魯迅の批判精神や絶望への反抗を見習うものもあれば、単なる自分の知名度を高めようとするもの、または政府や営利組織の宣伝もある⁽²³⁾。これらは魯迅の影響力を物語る。魯迅は聖壇から降りてからでも人々に忘れられることがなく、語り続けられている。

後に述べる国語教科書における魯迅作品の掲載に関する議論は、こうした情報社会の発達及び魯迅・魯迅作品に対する評価の多様化と無関係ではない。

II 国語教育改革と魯迅作品の扱い

では、国語教育で革命者への国民形成に期待された魯迅作品は、改革開放以降の社会変化と魯迅・魯迅作品に対する評価の多様化につれ、その扱

(22) 前掲、葛濤 (2012)、234-235頁。

(23) 前掲、葛濤 (2012)、233頁。

いはどう変化しているのだろうか。

改革開放以降の教育改革は社会主義近代化の建設に向けて絶えず進められてきた。そのうち、国語教育の指針となる国語科教学大綱または課程基準で示された国語科の性質と機能を表3にまとめてみた。第Ⅰ期の国語教育は文革直後であり、政治教育とプロパガンダの性質がまだ色濃く残っている。第Ⅱ期に改革開放に向けて国語教育の行き過ぎた政治化を是正し、言語教育の視点が強まった。当時の国語教育界では国語教育の科学主義論が盛んであったが、それは国語教育の脱政治化を図り、言語教育の視点から国語教育の充実を図る趣旨であり、高い国語能力をもって学習や仕事をやりこなす社会主義国の公民育成を求めた。第Ⅲ期は改革開放が一層進む時期であり、国語教育の科学主義が機械的なものと批判され、コミュニケーション能力と文学的教養を図る国語教育の側面が重要視された。第Ⅳ期は中国がWTO加盟を実現し、世界とのつながりがいっそう緊密になる時期であり、人文教育としての国語教育の意義が強調され、文化的素養と健全な人格をもつ人間像を追求するようになった⁽²⁴⁾。

こうした国語教育の変容につれ、長らく国語教科書に収録された魯迅の作品は大きな変化を迎えた。表3の各時期の代表的なものとして、教科書最大手の人民教育出版社が出版した中学校と高校の国語教科書⁽²⁵⁾を確認してみたが、結果は表4の通りである。それより次の2点が明らかである。一つは作品数が大幅に減ったことである。1980年代に魯迅作品は22点も掲載されたが、2000年代以降は半減した。魯迅作品の重要度が相対的に

(24) 国語教育の変容について、前掲した武小燕(2013)、206-226頁を参照されたい。

(25) 表4で参考にした教科書は次の通りである。

第Ⅰ期：人民教育出版社中学語文編輯室編『語文』（中学校）（第一冊～第六冊）、1981～1983年。人民教育出版社中学語文室編『語文』（高校）（第一冊～第六冊）、1983～1985年。

第Ⅱ期：人民教育出版社語文一室編著『九年義務教育四年制初級中学教科書 語文』（第一冊～第八冊）、1992～1996年。人民教育出版社語文二室編『語文』（高校）（第一冊～第五冊）、1990～1995年。

第Ⅲ期：人民教育出版社中学語文室編著『九年義務教育三年制初級中学教科書 語文』（第一冊～第五冊）、2001～2002年、第六冊は欠ける。人民教育出版社中学語文室編著『全日制普通高級中学教科書（試験修訂本・必修）語文』（第一冊～第六冊）、2000～2002年。

第Ⅳ期：課程教材研究所・中学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書 語文』（7学年上冊～9学年下冊）2003～2013年。人教教育出版社課程教材研究所・中学語文課程教材研究開発中心・北京大学中文系語文教育研究所編著『普通高中課程標準実験教科書 語文』（必修）（語文1～5）、2006～2007年。

表3 各教学大綱・課程基準における国語科の性質と機能に関する規定内容の変容

名称	区分	公布年	対象	適用地域	国語科の性質	国語科の機能
教学大綱	第Ⅰ期	1978年(試行版)	中高校	全国	思想性・政治性が強く、特定の階級の政治に奉仕するもの	思想性も専門性も身につける人材の育成
		1980年(試行版)		全国		
	第Ⅱ期	1986年	中高校	全国	学習と仕事のツール	理想・道徳・文化を持ち、規律を守る社会主義的公民の育成
		1990年(改訂版)		全国		
		1988年(第1次審査採用版)	中学校	28の実験区		
		1992年(試行版)		実験区から全国へ		
	第Ⅲ期	2000年(試行改訂版)	高校	全国	コミュニケーションのツール・文化の一部	民族の優れた文化の発揚と人類の先進的な文化の吸収、国民素質の向上
		1996年(試行版)		2の省と1の市		
		2000年(試行改訂版)		10の省・市		
		2002年		全国		
課程基準	第Ⅳ期	2001年(試行版)	義務教育	38の実験区から全国へ	交流の道具・文化の一部、道具性と人文性の統合	生徒の全面的発達と生涯発達、個性の伸長、文化的アイデンティティの育成と人類文化の吸収
		2004年(試行改訂版)				
		2003年(試行版)	高校	4の省から全国へ		
		2011年	義務教育	全国		

出所：各教学大綱・課程基準に基づいて筆者が作成。

注：中国の義務教育は小中学校の9年間である。

低下したが、作家別でみると掲載作品数が依然としてトップである。

もう一つは、掲載作品のテーマが大きく変わったことである。1980年代の掲載作品は批判性の強い雑文が多かったが、1990年代に一部の雑文と難解と思われる小説が削除され、2000年代以降批判性や革命性の強い文章が更に減り、親しみやすく分かりやすい作品が追加された。例えば、民間伝承で封建的思想を否定する「雷峰塔の倒壊を論ずる」、学生運動に

表4 中学校と高校の国語教科書における魯迅作品の変遷(1980年代～2010年代)

番号	作品名(括弧内は中国語)	第Ⅰ期 (教学大綱)	第Ⅱ期 (教学大綱)	第Ⅲ期 (教学大綱)	第Ⅳ期 (課程基準)
		1980年代	1990年代	2000年代	2000年代～2010年代
1	百草園から三味書屋へ(従百草園到三味書屋)	中1	中1	中1	中1
2	村芝居(社劇)	中1	中1	中1	中1
3	些細な事件(一件小事)	中2	×	×	×
4	故郷(故郷)	中2	中2	中3	中3
5	雷峰塔の倒壊を論ずる(論雷峰塔的倒掉)	中2	中2	×	×
6	藤野先生(藤野先生)	中3	中3	×	中2
7	孔乙己(孔乙己)	中3	中4	×	中3
8	「友邦驚愕」を論ずる(「友邦驚詫」論)	中3	中4	×	×
9	刘和珍君を記念して(記念刘和珍君)	高1	高1	×	高1
10	菓(菓)	高1	高2	高2	×
11	持ってこい主義(拿来主義)	高1	高1	高1	高2
12	祝福(祝福)	高1	高2	高2	高2
13	「家をなくした」「資本家の能ないぬ」「喪家的」「資本家の乏走狗」	高2	×	×	×
14	忘却のための記念(為了忘却的記念)	高2	高2	高1	×
15	阿Q正伝(阿Q正伝)	高2	高3	高3	×
16	狂人日記(狂人日記)	高2	×	×	×
17	『呐喊』原序(『呐喊』自序)	高2	高2(閱)	×	×
18	範愛農(範愛農)	高3	×	×	×
19	文学と汗(文学和出汗)	高3	高3	×	×
20	中国人は自信を失ったか(中国人失掉自信力了吗?)	高3(閱)	高3	中3	中3
21	人が識字したらとぼけ始める(人生識字糊塗始)	高3(閱)	×	×	×
22	北斗雑誌社の質問に答えて(答北斗雑誌社問)	高3(閱)	×	×	×
23	「フェアプレイ」はまだ早い(論「費厄泼頼」應該緩行)	×	高2	×	×
24	灯火下の雑記(一部)(灯下漫筆(節選))	×	×	高2	×
25	阿長と『山海経』(阿長与『山海経』)	×	×	中2	中2
26	魯迅自伝(魯迅自伝)	×	×	中2	×
27	雪(雪)	×	×	×	中2
作品数		22点	17点	12点	11点

出所：人民教育出版社が発行した教科書に基づいて筆者が作成。

注1：第Ⅲ期の教科書には1冊(中3後期用の第六冊)が欠けている。

注2：1980年代等の年代表記はそれらの教科書が主に使用された時期を意味する。

中3：「中1」や「高1」とはその作品を取録した教科書が使用される学年を意味する。

注4：「×」とは取録なしを意味する。

注5：「閱」とは詳細な読解を省いてよい閲覧作品としての扱いを意味する。

対する国民党政府の姿勢を批判する「『友邦驚愕』を論ずる」、シェイクスピア研究者の梁実秋が主張したヒューマニズムを風刺する「『家をなくした』『資本家の能ないぬ』」、封建社会の儒教倫理を強烈に批判する「狂人日記」、革命家の範愛農を偲び、社会への不満と失望感があふれた「範愛農」など、これらの作品は次第に姿が消えた。その代わりに、幼い時の使用人を愛情の満ちた語りで偲ぶ「阿長と『山海経』」、雪の風景と思い出を通して苦難に屈しない希望を描いた「雪」等の作品が登場した。これらの作品で示された魯迅像は革命家の魯迅から文学者の魯迅へと変化したと言える。

さらに、同じ魯迅作品でも時期によってその解釈が変わった。たとえば表5では魯迅の小説「菓」について、異なる時期の教科書で提示された解釈を示している。82年版教科書の解釈では、作品の趣旨を封建主義と資本主義革命への批判としたが、90年版教科書の解釈では資本主義革命への批判ではなく、革命家への同情との視点が変わった。そして2000年版になると、「悲劇」だと解釈されるようになり、強引とも言える革命的な解釈から作品の本来の趣旨に立ち戻った。すなわち、革命性や闘争性が評価された魯迅作品だったが、2000年代以後「民族の魂」を改造しようとする魯迅作品の人文性がより注目され、人物の内面性や人間性の複雑さに関する理解が求められるようになった。こうした変化は掲載された魯迅作品の変化の傾向と同じく、魯迅作品の革命性から魯迅作品の文学性へと読解の視点が変わった。

もつばら、改革開放以降の国語教育改革では Kommunismus 志向からヒューマニズム志向へと変わり、掲載作品の趣旨は全体的に政治性・革命性を訴えるものから文化的・人文的テーマへと転換していることが大きな傾向であるため、魯迅作品に限らず、ほかの作品にも同様な変化が見られる。例えば、高校の国語教科書に掲載された外国作品は、1990年代まではプロレタリア革命者の記念作品や資本主義批判の作品は多かったが、2000年代以降次第に人文性や科学性の優れた作品に取り替えられた⁽²⁶⁾。

但し、前述のように魯迅作品は中国の国語教育では特別な意味を持つ。

(26) 前掲、武小燕 (2013年)、222-223頁。

表5 高校の国語教科書で示された魯迅の「薬」に関する解釈の変容
(下線は筆者)

教科書	解釈の提示
82年版	これは、魯迅が「五四」運動の直前に書いた辛亥革命期の中国社会の現実を描いた小説である。作品は、華と夏という二家族の悲劇を通して封建制度の罪悪を告発し、封建的統治階級が革命を鎮圧し、民を愚弄する反動的な本質を暴いただけではなかった。もっと重要なのは、封建制度を倒すために犠牲になった革命家の夏瑜の血が、まさに貧民の華老栓夫婦が息子の病気を治すための「薬」になったという意味深い事件を通して、辛亥革命における革命家と民衆の関係を提示し、民衆からかけ離れた資本主義の旧民主主義革命の過ちを批判し、一つの側面から辛亥革命が失敗した歴史的な教訓をまとめた。この作品は次のことを教えている。つまり、民衆を動員する以外に革命は勝利できず、中国を救うことはできないということである。
90年版	「薬」は辛亥革命期の中国社会の現実のある側面を示した。作品は、華と夏という二家族の悲劇を通して封建制度の罪悪を告発し、封建的統治階級が革命を鎮圧し、民を愚弄する反動的な本質を暴いただけではなかった。もっと重要なのは、封建制度を倒すために犠牲になった革命者の夏瑜の血が、まさに貧民の華老栓夫婦が息子の病気を治すための「薬」になったという意味深い事件を通して、民衆の愚昧と革命家の悲哀を表したのである。
2000年版	「薬」は辛亥革命期の社会現実を背景とし、光復会のメンバーである徐錫麟、秋瑾が清政府に殺害された事件を手掛かりに、革命家たちが民衆のために犠牲になったのに、民衆たちの理解が得られないという悲劇を描いた。

出所：楊孝如「1977年以来中学語文教科書対課文解読的影響論析」『寧波大学学报（教育科学版）』第27巻第1期、2005年2月、111頁。

毛沢東に絶賛された革命性・闘争性・自己犠牲を特徴とする「魯迅精神」が長らく国語教育等を通して国民に浸透するように図られただけに、表4で示された魯迅作品の扱いはとりわけ注目され議論されがちである。そのうち、2010年頃の「魯迅大撤退」論は特に大きな波紋を起し国民的大論争に発展した。

III 「魯迅大撤退」論

「魯迅大撤退」論の発端はブログにおける個人のつぶやきであったが、魯迅に対する国民的な関心とネット社会における情報伝達の速さであつという間に国民的な大議論を巻き起こした。

2010年9月6日に脚本家の劉毅がソーシャルメディアのミニブログで「新学年が始まった。各地の教材が大きく変わった」と指摘し、特に魯迅作品が国語教科書から多く外されたことから「魯迅大撤退」と驚きの声をあげた。それはたちまち多くのメディアの注目を集めた。9月8日の『廣州日報』が「高校の教科書は大変身、『魯迅大撤退』が論争を起こす」⁽²⁷⁾を題とする記事を、9日には上海の『東方早報』が「国語教科書改革は魯迅のことだけではない」⁽²⁸⁾との記事を掲載した。また、大手ポータルサイトのテンセントでは9日に「教科書の文章は削除できるが、魯迅は削除できない」⁽²⁹⁾との特集を組み、鳳凰網も魯迅大撤退に関する言論を集め⁽³⁰⁾、その是非について論じた。

以下はその議論の主な参加者として教育界、言論界、草の根の意見をまとめてみる。

1. 教育界の意見

魯迅作品の削減の主な支持者は教育界である。前述の通り、国語教育では長い間「革命性」や「闘争性」という視点からしか魯迅作品の読解を認められなかった上に、作品の表現や主旨に今日の生徒たちにとって難解なものが多いため、魯迅作品の教え方に頭を悩ませている教員が少なくない。2009年に上海で開かれた第四回魯迅論壇と全国中高校魯迅作品教学評価活動には全国から多くの国語教員が参加したが、魯迅作品の教授に最も自信あるはずの彼らからは「魯迅の作品にはとても分かりにくいものがある」、「魯迅の作品を読んだら希望が見えなくなり、重苦しい」といった意見が多く上がった⁽³¹⁾。

2012年に華東師範大学国語教育研究センターが発行する『中文自修』誌が行った中学と高校の国語教員を対象としたアンケート調査の結果によ

(27) 「高中課本大『変臉』『魯迅大撤退』惹爭議」『廣州日報』2010年9月8日。

(28) 周澤雄「語文教材改革、不僅僅關乎魯迅」『東方早報』2010年9月9日。

(29) 「刪得掉的課文 刪不掉的魯迅」(騰訊網「今日話題」第1378期、2010年9月9日) <http://view.news.qq.com/zt2010/deleteluxun/index.htm> (2017年1月2日閲覧)

(30) 「我是魯迅」(鳳凰網「自由談」第311期、2010年9月9日) <http://news.ifeng.com/opinion/special/luxundachetui/> (2017年1月2日閲覧)

(31) 邱煥星・郭端芬「『魯迅大撤退』現象研究」『現代中文學刊』(34)、2015年第1期、2015年2月、26頁。

れば、教員の約半数が魯迅の作品は中学生と高校生に適していないと考えている⁽³²⁾。魯迅作品の教育的意義を評価する賛成派でも魯迅作品が生徒には理解しにくく、興味を持ちにくいことを認めている。国語特級教員の黄玉峰は魯迅作品について「表現が迂遠かつ文字が難解で、小中高校生にとって確かに読みにくい」と述べ、また「魯迅の批判精神は称えるべきだが、激しすぎる面もある」と指摘し、同時代の作品なら優れた作家がほかにも多くいるので、魯迅に拘る必要はないという⁽³³⁾。

生徒の間では、国語をめぐる「一番難しいのは古文、二番目は作文、三番目は魯迅だ」と言われている。魯迅の作品は難解であるうえに決まった解釈しか認められないため、生徒たちに敬遠されてしまう。実際、魯迅の作品には通常とは異なる言葉遣いがしばしば現れる。例えば中国語の「記念」と「紀念」は辞書では同じ意味で、通常は後者を使用するが、魯迅の文章に登場する「記念」と「紀念」だけは明確に区別しなければならない⁽³⁴⁾。さらに、魯迅作品は句読点の一つ一つも大きな意味を持つとされ、生徒らにその理解が求められる⁽³⁵⁾。国語教育で神聖化された魯迅像は生徒たちにとって親しみにくいものである。

国語教育改革のリーダーである温儒敏は著名な魯迅研究者でもあるが、国語教科書における魯迅作品の扱いについて「各段階の国語教育の目標に応えられるものかを考えた上で取捨選択すべきであり、文学史における魯迅作品の価値だけで判断してはならない」⁽³⁶⁾とし、魯迅作品に拘る国語教育の在り方に批判的である。

このように教育界では子どもの発達と興味関心を踏まえて言語力や読解力を身につけられるように、国語教育の有効性を優先的に考慮すべきだという意見から、魯迅作品の削減を支持する意見が多い。こうした考えは次の意見に凝縮されているように思われる。

「魯迅と魯迅の作品は国語教育の成否を決める要素ではない。国語が生徒にとって興味のあるものになれるかどうか、作家の主旨が正しく

(32) 蘇軍・湯曉暉「魯迅作品是否適合中学生？」『文匯報』2012年5月11日。

(33) 王蔚・馬丹「中学課本刪減魯迅爭議再起」『新民晚報』2013年9月6日。

(34) 趙樹華・王廷徳「魯迅作品中的『記念』与『紀念』」『語文學習』1988年第8期、13-14頁。

(35) 魯肇文・李白堅「魯迅作品中的標点符号」『語文學習』1981年第9期、10-11頁。

(36) 温儒敏『温儒敏論語文教育三集』北京大学出版社、2016年、76頁。

理解されるかどうか、国語教育の目標に到達できるかどうか、国語教育の成否を左右する大切な要素である」⁽³⁷⁾。

2. 言論界の意見

生徒の学習の視点から魯迅作品の適否を論じる国語教育界に対し、言論界では特に魯迅作品の思想性に注目し、国語教育が担うべき国民形成の課題という視点から論じる傾向が強い。

魯迅研究者の汪暉は「私たちが彼を拒絶するのは、彼が時代遅れなためではなく、私たちが彼を恐れており、彼の力を感じ取っているからである」⁽³⁸⁾と論じ、魯迅の描いた社会現象が再び世の中に溢れているがゆえに魯迅が敬遠されたのだと社会批判を展開した。汪は魯迅作品が教科書に多く収録されることを望む一方、受験勉強で強いられるステレオタイプの解釈では作品の生命力が亡くなってしまうと批判した。前述の温儒敏は魯迅作品の扱いに慎重な立場だが、魯迅・魯迅作品について「私たちはますます魯迅を大切にすべきだ——彼の独立精神、自由思想及び中国文化と中国人に対する冷静な認識は、いずれも私たちに不足しかつ非常に必要なものだ」⁽³⁹⁾と評価している。

魯迅必要論の積極的な提唱者である錢理群も、従来政治化された魯迅像を否定し、魯迅が新文化運動の主将でも先駆者でもない指摘する一方、その独立した懐疑精神は今日の中国でとても稀少なものであり、継承すべきだと主張した⁽⁴⁰⁾。錢は2004年に南京師範大学付属高校で、選択科目の「魯迅作品選択科目」を開講し、そこで従来頑固で親しみにくい魯迅像を改めるために、魯迅の作品や手紙を精選して家族を大切にす魯迅像や情緒豊かな魯迅像を生徒に示した。親しみやすい魯迅像を打ち出した授業は生徒の興味を大いに喚起したという。錢はこの科目の趣旨を「魯迅精神の根を子どもの心に下ろす」ことにあるとし、中国の魯迅はイギリスのシェ

(37) 郭文婧「『語文回帰』比『魯迅大撤退』更值得思考」『文芸報』2010年9月17日。

(38) 汪暉「阿Q時代的『死去』与『活来』」『語文建設』2011年第4期、48頁。

(39) 温儒敏「如何理解魯迅精神的当代價值：和山東大学学生討論魯迅」『甘肅社会科学』2014年第2期、69頁。

(40) 錢理群「我們今日為什麼需要魯迅」『社会科学論壇』2013年第4期、120-130頁。

イクスピアのように、国の精神的な源になる人物だと位置づけた⁽⁴¹⁾。

他方、魯迅撤退論に賛成し、なおかつ魯迅・魯迅作品そのものに批判的な意見も見られる。魯迅研究者の朱正は魯迅の作品がすべてよいとは言えず、「魯迅を読む若者がだんだん減ってきたのは、時代が進歩したからだ」と述べる⁽⁴²⁾。時代が変わった以上、魯迅に拘る必要はなく、他の優秀な作家の作品を教科書に入れるべきだとの見解を示した。

魯迅大撤退論の是非をめぐるのは中国本土だけでなく、海外の魯迅研究者も意見を表明している。アメリカのラフリン (Charles A. Laughlin) の魯迅大撤退論に対する最初の反応は「驚きと反感」だったという。魯迅の作品は独立性と批判的思考に満ちており、かつ文学的な手法で社会や歴史に対する関心を表現しているため、中等教育の段階でそれらを生かす価値が十分であると肯定した⁽⁴³⁾。

以上をまとめると、言論界では魯迅作品を国語教育に活かすべきだという意見が多数でありながら、魯迅作品に拘る必要はないという意見が散見される。批判性や独立性といった魯迅精神の価値を肯定し、それを国民教育に積極的に取り入れるべきだという主張は言論界では根強いと言える。彼らが認める魯迅精神は毛沢東時代に奨励された魯迅精神の中身と大きく異なることは注目に値しよう。

3. 草の根の意見

改革開放以降、社会ではステレオタイプ化された革命魯迅に対する反感が広がり、1990年代ごろ中国に登場したさまざまな思潮による魯迅批判はこうした背景と無関係ではない。一方、1990年代は海外の思潮が中国に広がってきた時代であると同時に、中国民国期に対する関心が高まる時代でもあった。長年にわたって革命史観の視点で描かれてきた民国社会が、ようやく生き生きとした姿で人々の前によみがえったのである。革命魯迅、啓蒙魯迅に続き、人文魯迅や世俗魯迅も登場するなど、本来の魯迅に対す

(41) 銭理群・孫紹振『対話語文 銭理群教授与孫紹振教授関于語文的對話』福建人民出版社、2005年、218-236頁。

(42) 羅昕・宋浩「魯迅研究者朱正：對教材中的『魯迅大撤退』併不反感」『澎湃新聞』2015年9月24日。

(43) 孫妙凝「魯迅精神的当代價值不容抹殺」『中國社會科學報』2013年9月9日。

る認識が深まりつつある。吉林大学の張福貴が指摘したように、「1990年代は反省の時代であり、その結果の一つは五四新文化運動の伝統に対する懐疑と『国学』の復興であった。その価値志向は魯迅を否定する志向と関連し、民間とりわけインターネットの世論では一時に魯迅嫌いが流行っていた。しかし、21世紀以降魯迅に対する民間社会の評価が逆転し、魯迅を求める声がむしろ民間から高く上がってくるようになった」⁽⁴⁴⁾。

新浪サイトは2006年に行った調査のなかで「魯迅作品が小中高校の教科書に掲載する作品としてふさわしいと思うか」という質問を設けた。それに対して、回答者の48.62%が「作品次第」、38.39%が「どの作品もふさわしい」、11.58%が「難し過ぎるから全くふさわしくない」、1.41%が「よく分からない」という回答であった⁽⁴⁵⁾。回答者の4割は国語教科書における魯迅作品の掲載に無条件に賛成し、5割は作品を精選すれば国語教育に相応しいとした。つまり、賛成及び条件付きの賛成は合わせて9割ほどであった。

また、前述したテンセントが2010年9月9日に開設した魯迅撤退論の是非を論じるサイトで行った世論調査によれば、「あなたは教科書から魯迅の作品を削除することについて支持しますか」という質問に対して、「支持する」は6,974票、「支持しない」は581,293票で圧倒的に多かった⁽⁴⁶⁾。ネットユーザーの意見を見ると、「悲劇だ！魯迅の作品よりは、英語の勉強をやめるべきだ！」、「魯迅がいないと、生活の深みが味わえなくなる」⁽⁴⁷⁾などの意見が上がっており、魯迅作品の民族性と思想性が国民教育で大切なものだと考えが示されている。

2010年に上海魯迅記念館が行った魯迅の社会的認知度に関する社会調査では、「中学や高校の国語教科書に魯迅の作品を入れるべきか」という質問に対し、入れるべきと答えた人が82.84%で大半を占めた。どちらでもいいと答えた人は12.83%であり、入れるべきではないと答えた人は僅

(44) 張福貴「魯迅研究的三種範式与当下的價值選択」『中国社会科学』2013年第11期、163-164頁。

(45) 前掲、葛濤(2012)、192頁。

(46) http://view.news.qq.com/zt2010/deleteluxun/index.htm?pgv_ref=aio (2018年1月28日閲覧)

(47) <http://edu.qq.com/zt2010/zyht/lxwzct.htm> (2018年1月28日閲覧)

か4.34%であった⁽⁴⁸⁾。

以上の世論調査の結果では、いずれも魯迅作品に対する高い支持が見られた。魯迅作品は国語教育の糧となるべきであるとし、魯迅大撤退に否定的な意見が多数を占めた。

もっぱら2000年代には国語教育改革における作品の取捨選択の是非に関する議論が絶えず起きており、それは魯迅作品に限らなかった。第Ⅳ期の教科書は新しい地域に適用されるたびに議論が起きた。しかし、初期の議論では削減された作品よりも、新たに登場した大衆小説や時の人の作品の適切性が中心であり、議論の関心も課程改革に限定されていた。ところが、魯迅の作品が取り上げられると社会的関心が一段と高まり、批判的な意見は教育学の視点からよりマクロな社会文化の視点に変わった。「魯迅」と「国語教育」という言葉の組合せにより、2000年代以降高まった魯迅への関心と国語教育改革に対する関心がクロスしたのである。そこに議論の拡大に拍車をかけたニューメディアの影響力に加え、この「魯迅大撤退」の議論に発展した。

魯迅精神をどうとらえるか、国語教育がどうあるべきかという問いは、今日の時代にいかなる国民を育てるべきか、ひいてはいかなる国家像を求めるべきかへの関心の現れだと言えよう。

Ⅳ まとめ

魯迅作品はかつて国民の革命性を培うように国語教育で大いに重要視されたが、改革開放以降国語教科書に掲載された魯迅作品の数もテーマも大きく変わり、国民形成に寄与した魯迅作品の役割の変化が見える。その変化の意義は2010年前後の魯迅大撤退論を踏まえながら、次のようにまとめられる。

第1に、今日の中国における魯迅と魯迅作品が持つ意味の大きさを改めて認識させられた。毛沢東時代の革命魯迅像は強力なプロパガンダと共に

(48) 前掲、周令飛 (2011)、351頁。

人々に認識されたが、改革開放以降、彼を批判するにしても擁護するにしても、人々は真実の魯迅を知ろうとした。その過程で啓蒙魯迅、人文魯迅、世俗魯迅など多様な魯迅像が現れ、聖壇に祭られていた魯迅は、かえってより豊かな姿で社会に浸透した。さらに、魯迅と魯迅作品の特殊性のために、人々の関心は魯迅と魯迅作品そのものにとどまらず、聖人と持ち上げられた人物像の再構築を通して権威主義に反発した。彼は、表現の自由、思想の自由を求めるシンボルとして捉えられるようになった。

第2に、魯迅大撤退論からはいかなる国民精神を求めるべきかが社会的な論点となっている様子がかうかかえる。魯迅作品における国民性や伝統文化に対する深い洞察を肯定する意見や、魯迅作品の批判性を評価する意見には、魯迅の力を借りて国民改造と社会改造を期待する思いが寄せられている。誰にも妥協しない独立精神への称賛には、独立した自由な人格への憧れを見ることができよう。議論のなかで言及された魯迅精神には明確な定義がないものの、従来の毛沢東が語った革命性や闘争性に代わって、独立性や批判性が国民精神に不可欠なものとして人々に求められていることが明らかである。

第3に、国語教育の役割に対する認識の変化を読み取ることができる。国語教科書は長らく思想教育の道具として機能し、その過程では詰め込み教育が行われていた。しかし、2000年代以降の教育改革では、子どもの興味関心に応えられるかどうか、子どもの言語力と文化に対する感受性を養えるかどうか重視されてきた。結果的に国語教科書に掲載される作品は大きく変わり、魯迅作品を含む難解な作品は教科書から姿が消えた⁽⁴⁹⁾。国語教育は大人が考える思想性よりも、まずは学習の主体である子どもの興味関心を踏まえることで効果を高めるべきだという意見は、多くの教育関係者によって共有されている。それは教育現場における児童中心主義の高まりと見てよかろう。

2010年代に国語教科書は教育部の委託作成により統一され、2017年から次第に全国で使用されるようになった。その中学校と高校の教科書に入れた魯迅作品は表4の第IV期と殆ど同じだが、『雪』が削除され、革命活

(49) 国語教科書に掲載される作品の変化について次の文献を参照されたい。阿古智子・大澤肇・王雪萍編『変容する中華世界の教育とアイデンティティ』国際書院、2017年、110-118頁。

動で犠牲になった文学青年を記念する『忘却のための記念』と代表作の『阿Q正伝』が追加されたのは興味深い⁽⁵⁰⁾。2017年版高校国語課程基準では社会主義思想教育の強調が見られる一方、統一教科書を監修した温儒敏は教科書や教材ばかりの勉学を批判し幅広く読書するようにと求めている。統一教科書にははじめて速読等の読書法が取り入れられ、教科書以外の幅広い読書こそ国語の素養を高める方法だと主張された⁽⁵¹⁾。統一教科書と教科書に拘らない国語の素養を高める動向は矛盾しているように見えるが、そこに教科書統制を強めようとする政府のスタンスと、より大きな文化的素養によって教科書の機能を相対化しようとするリベラル知識人たちの思惑との違いがあるように思われる。新しい国語教育の実態と国民形成への影響はいかなるものかについて今後検討したい。

(50) 教育部監修『義務教育教科書 語文』（七学年上冊～九学年下冊）、2016～2018年。教育部監修『普通高中教科書 語文』（必修上・下、選択必修上・中・下）、2019～2020年。

(51) 教育部「介紹義務教育三科教材有關情況 文字実録」（2017年8月28日）http://www.moe.gov.cn/jyb_xwfb/xw_fbh/moe_2069/xwfbh_2017n/xwfb_20170828/201708/t20170828_312505.html（2021年9月10日閲覧）